

自然素材を使用した造形教育の検討 —— 地域施設と連携したワークショップの実践から ——

渡 辺 一 洋

An Analysis of Arts and Crafts Education on Natural Materials : Based on a Workshop Collaborated with Amusement Parks

Kazuhiro Watanabe

Abstract

In recent years I conducted several workshop with students of the childcare course at Ikuei College and the main purpose of the workshops is to get children involved in arts and crafts. In light of the circumstances of contemporary society, it is assumed that prospective preschool teachers should improve their teaching skills to children regardless of their age as well as communication skills with different generations. Moreover, the students, as promising teachers, should acquire basic abilities to produce pieces of art with children, developing their views towards lifelong education in a local community. In this paper, I examine the results and the problems of several workshops I have put into practice with students since 2006 and analyze the future directions.

Keywords : Collaborated with amusement parks, Workshop, Crafts education, Children's play and crafts, Climate and nature material

キーワード : 地域連携, ワークショップ, 造形教育, 子どもの遊びと造形, 風土と自然素材

1 はじめに

昨今、子育て支援に関する取り組みは全国的に広がってきている。全国の地域サークルや保育園、保育士養成校などでも、多くの子育て支援の取り組みが行われ、年々、増加傾向にある。その背景には、核家族の増加、少子化などがあり、親の育児に対する不安や悩みへのサポートと安心して子どもを産み育てられる社会をつくるという目的がある。

読売新聞社が立ち上げた「よみうり子育て応援団」では、育児・保育・教育の各分野の専門家、

子育ての専門家、子育て経験の豊かな著名人、保育の実践家など30名余りが、全国各地で「相談トーク」を行っている。2007年には、この取り組みは「よみうり子育て応援団大賞」に発展し、日本全国で子育て支援を行っている大小のグループへ子育て応援団のメンバーを派遣して直接応援する新しい事業を始めた。このように、子育て支援の取り組みは発展途上にあり、子育て問題を柱とする子ども問題の解決に、新しい道を開く可能性を多く含んでいる。

また、現在の社会は、物質的に満たされ、生活は豊かになったものの、反面、心の貧しい時代に

なっている。隣人とのコミュニケーションが軽薄になり、親子間の事件も後を絶たない。

このような社会状況から、「子育て支援」の要素を含む造形ワークショップを試みることになった。さらに、筆者は育英短期大学に勤務しており、保育士を目指す学生の教育に携わっていることから、保育士養成という立場からも意味のあるワークショップができないかと考え、育英短期大学保育学科の学生を補助役として活用することにした。

ワークショップの会場としては、群馬県前橋市の商業施設D（以下施設Dとする）を選択し、交渉した。その理由は、以前、滋賀県にある同系列の商業施設内の美術館で取材を行ったことから、前橋市にも自然、農業体験のできるテーマパークがあることを関係者から聞いていた。自然と芸術は連鎖しあうものであり、優れた芸術は自然環境からインスピレーションを受けて構成されている作品が多いことから適切であると考えた。このような経緯から、地域施設と連携して地域風土の中で育まれた自然素材を使用したワークショップの実践が実現することとなった。

本研究では、これまで施設Dと連携しながら行った計4回のワークショップを振り返り、ワークショップに参加した子どもや保護者とその場を補助する学生による共同体の関係に視点を置き、子育て支援の可能性として意義があるか検討する。さらに、自然素材が子どもの表現にどのように影響を与えるかについて考察する。

2 実践内容

1) ワークショップ (workshop) の定義

ワークショップとは「仕事場」や「工房」を意味する英語で、現在のような新しい意味で使用されるようになったのは演劇や美術などの分野や都市計画などまちづくりの分野からである。近年、様々なワークショップが行われているが、中野(2001)は「実際にアートとしてのワークショッ

プはどのように捉えられているのかについて、演劇、ダンス、音楽、アート系などは、自らの身体を使って実際に習ったり学んだりすることが多いので、あえてこれをワークショップと呼ばなくとも、もともとがワークショップ的であった¹⁾としている。

さらに、中野はワークショップと呼ばれているものについて以下のように述べている。

昔からあるお稽古ごとの「教室」ではなく、わざわざ「ワークショップ」と題しているものは、通常の「創る人と見る人」の位相を越えた問い直しを迫るラディカルなものが多い。また、「自分を表現していく」内的な学びのプロセスを重視したり、「未知なるものを集団で創造していく」など真の創造性に挑戦したり、自らの身体や声による切実な表現こそが、社会や世界の変革につながるという大きな視野を持つものなど、幅が大きい。²⁾

また、中野はワークショップの定義について、講義など一方的な知識伝達のスタイルではなく、参加者が自ら参加・体験して共同で何かを学びあったり創り出したりする学びと想像のスタイルとし、「参加学習体験学習」と訳すことにより、「参加」「体験」「グループ」という3つのキーワードになる学習法について次のように述べている。

「参加」とは先生や講師の話を一方向的に聞くのではなく、自ら参加し関わっていく主体性、「体験」とは頭だけでなく身体と心をまるごと総動員して感じていくこと、「グループ」とはお互いの相互作用や多様性の中で分かち合い刺激しあい学んでいく双方向性などを表している。このような双方向性、全体性、ホリスティック（全包括的）な「学習」と「創造」の手法が「ワークショップ」³⁾だ

このように全体性を重視するようなホリスティックな新しい教育の枠組みであるワークショップは、従来型の教師と生徒によるそれぞれが独立した教育ではなく、お互いが重なり、影響

しあう特徴がある。

また、ワークショップで重要な役割を果たすのが「ファシリテーター」である。ファシリテーターとは、人と人が集う場で、お互いのコミュニケーションを円滑に進行し、それぞれの経験や知恵や意欲を上手に引き出しながら、学びや創造活動、時には紛争解決を容易にしていく役割である。⁴⁾

2) 内容

実践場所：施設D（群馬県前橋市）のメイン広場
 時間：午前中（第2回のみ午前と午後の2部構成で行った）
 参加者：幼児、小学生とその保護者（施設Dを訪れていた地域の親子を中心に参加し

てもらうことができた）

- 活動の流れ： i. 受付
 ii. 本日の活動の説明と素材体験
 iii. 造形活動
 iv. 鑑賞
 v. アンケート

4回の活動の概要は以下の図1の通りである。

(1) プレイベント

2006年8月に施設Dにて、大型大洋紙に絵の具を使ったアクションペインティングのワークショップを行った。アクションペインティングはヨーロッパとアメリカを中心に発展した絵画表現であり、絵の輪郭やフォルムを構成する、いわゆ

回数と開催年月日	第1回 〈2006年10月21日〉	第2回 〈2006年12月16日〉	第3回 〈2007年5月3日〉	第4回 〈2007年8月11日〉	
テーマ	ラインアート	自然素材を使用したクリスマスツリー	木材を使用した造形活動	羊毛を使用した造形活動	
サポートした学生	育英短期大学 保育学科1年生5名	育英短期大学 保育学科1年生3名	育英短期大学 保育学科2年生16名	育英短期大学 保育学科2年生16名	
参加者	親子	25組	36組	26組	21組
	幼児	28	39	37	25
	小学生	13	16	9	5
用意した自然素材	施設D内の松ぼっくり、木の葉・木の枝、どんぐりなど			施設Dで飼育している羊の羊毛	

図1 ワークショップ内容の詳細と参加者状況



写真1

(施設D提供による木材)



写真2

(施設D提供による枯葉、木のつるなどの自然素材)

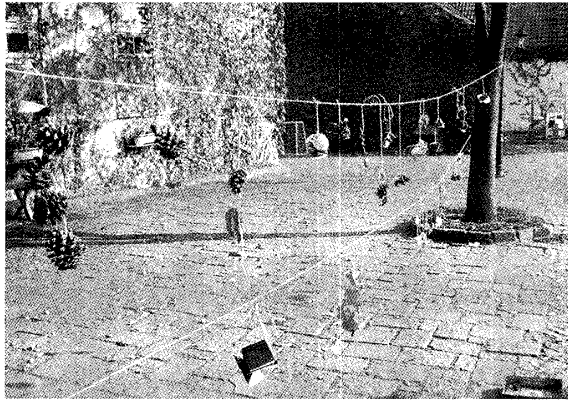


写真3
(完成作品)

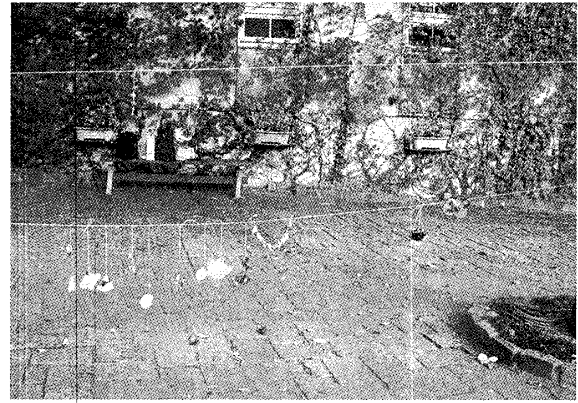


写真4
(完成作品)

る絵画の概念を用いない、抽象的で自由な絵画表現である。筆者はジャクソン・ポロック⁵⁾に代表されるこの技法を幼児にとって適した絵画表現であると仮定し、アクションペインティングのワークショップを行った。この実践では、幼児の絵画表現の様々な発見や手がかりが見えたものの、既成の筆や絵の具などを使用して活動することは赤城高原という立地条件を活かしているのかという点で疑問が残った。この点について、施設Dと打ち合わせしたところ、施設Dから、施設D周辺にある不要になった杉や松などの木材(写真1)、どんぐり、松ぼっくり、枯れ葉、木の枝(写真2)などを提供してもらえることになった。そこで、この自然素材を使用して、素材体験や季節感を感じることのできる造形ワークショップというテーマが生まれたのである。赤城高原の自然の中で育まれた自然素材は、形そのものが、すでに人工的ではない面白みに優れた素材であり、造形活動の素材として用いることは、幼児の思考を柔軟にして、発想を豊かにすることができる造形材料であると考えられた。以上の経緯から計画したのが、第1回の秋の自然素材を使用した造形ワークショップ「ラインアート」である。

(2) ラインアートの実践内容

ラインアートは現代美術の手法であるインスタレーションから発想した造形活動である。木と木

の間を渡したシュロ縄に、どんぐり、まつぼっくり、木の葉を使って、折り紙、絵の具などで装飾して飾りをつくり、参加者全員で1つの作品をつくるという内容である。

この活動の事前指導として、補助学生に対して、ワークショップの歴史や世界中で行われている事例、構成を紹介し、どのような効果があったのか説明を行った。その中で強調したことは、参加者はもちろん、企画している側も楽しいと思える魅力を見い出せなければ、継続できないということである。ワークショップの構成は「つかみ」→「本体」→「導入」というシステムが一般的に用いられる。参加者の学びと創造を深めるためには、企画者が、そのようにプログラムを構成しなければならない。その反面、企画者の狙いがあるにせよ、それを押しつけることは決して行ってはならない。進行していく上で事前に可能な限りワークショップでの状況を想定し、複数のプログラムの流れを考えて、準備する必要がある。

しかし、実際のワークショップでは、想定外のことが起こりうる。その時は、参加者の行為に臨機応変に対応することが大切となる。その場で臨機応変に対応し、進行していくことが重要であり、そのようにプログラムを進行していくのがファシリテーターである。ワークショップを行うにあたりファシリテーターは内容を教える従来型の教師とは異なり、参加者に対して身近な存在であると

ともに、全体の流れを把握し、その場の可能性をうまく発揮する重要な役割である。

このようなことを事前学習において確認し、ラインアートの実践に入ることとした。

当日は、まず、秋の自然素材を広場に用意し、秋という季節からイメージを膨らませられるように、参加者全員で話し合った。そこで、風になびいていたシュロ縄は川に見えると話していた子どもの発想から、天の川のようなイメージで制作してみようということになった。天の川は季節はずれであったが、発想としては、自分の願いなどをあらわす形をつくり、川のように動きのあるような作品を全員でつくりたいと参加者全員で考えた。そこから折り紙、アクリル絵の具、マジック、色鉛筆などを自然素材と組み合わせて、つくりはじめることとした。用意されていた、まつぼっくりやどんぐり、木の葉は子どもの造形活動によって虫や動物の顔などにできあがっていった。さらに、できあがった作品をシュロ縄に吊るす場面では、子ども達が試行錯誤しながら、シュロ縄に向かっていった。いびつな形をした松ぼっくりやどんぐりはガムテープで固定しても安定感がなく、視覚的にガムテープなどのテープ類を嫌う子どもはボンドを使うなどして苦心していた。また、シュロ縄に結ぶという行為自体が困難である子どもが多く見られ、保護者や学生が補助しながら作品をシュロ縄に結んでいた。この流れからできあがった作品(写真3, 4)は、当初のイメージのように秋の風になびき、参加した子ども全員の願いがこもったインスタレーション的な作品となった。

参加していた子どもの様子から、印象的だったいくつかの事例をあげる。Tくん(6歳)は天の川というイメージから、船を発想した。完成時にファシリテーターが願いごとを尋ねると「天の川にこの船で浮かびたい」と答えた(写真5)。また、Mくん(5歳)は連作で、草花、鳥、馬をつくり、天の川を舞台にした物語性のある作品をつくった(写真6)。この作品は保護者との会話のやりとり

の中から生まれた。作品づくりを全員でスタートした当初、Mくんはまつぼっくりやどんぐりなどの素材に興味を示していたものの「できない。つくって」とお母さんに発言していた。

しかし、お母さんから夏休みの旅行で牧場のある高原に訪れた時の思い出話をやりとりしているうちに、ちょうど川が流れていた光景を思い出し、そこにいた馬や鳥、青々と茂っていた草花を想像して、自分のつくりたい作品がイメージできたようである。実際に作品をつくる段階では、Tくんは大きい松ぼっくりや小さいどんぐりの活かし方にこだわりを見せていた。この場面では、実際にMくんのお母さんが模範作品として、いくつか草花、鳥、馬をイメージした作品をつくり、それを模倣、発展させながら、Mくんが自分自身で自然素材の多様な構成をつくる過程を踏んでいった。

この時、「これ見て。鳥が飛んでるよ」とお母さんに話しながら、つくっていた。模倣行為は「子どもは親の真似をするものである。模倣から始まる場合の造形教育の一つの原形を見ることができると高橋(2002)が述べているように初期学習の自発的学習を助けるものであると考えられる。Mくんはお母さんの模倣行為をしながら、新しいイメージが生まれ、模倣行為と自発的学習の関係から作品を作り上げたため、模倣そのものではない、事実、お母さんとは異なる完成作品に仕上げた。

以上のTくん、Mくんの事例から、他者による語りかけが相互作用となることが確認されたため、次回の課題として、子どもとの交流の中から創造性を自然に引き出す手法を重視することにし、幼児への語りかけについて、学生とともに練っていくことにした。補足ではあるが、ワークショップの際には各テーマに合わせて、施設Dの音楽プロデューサーにオリジナルの音楽を用意してもらい、参加者のイメージが膨らむようにした。例えば、ラインアートの際には「秋」「家族」「ふるさと」をテーマとしてバックで流れる音楽を作成し

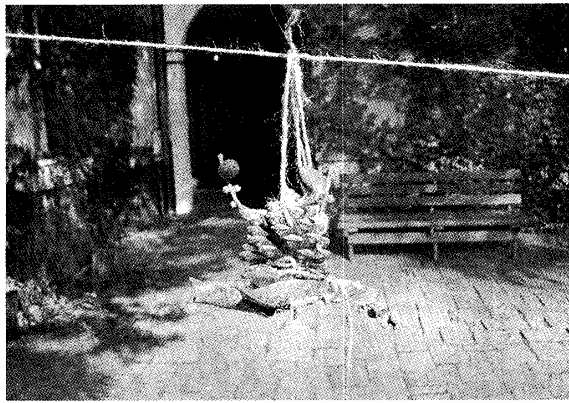


写真5
(Tくん作品)

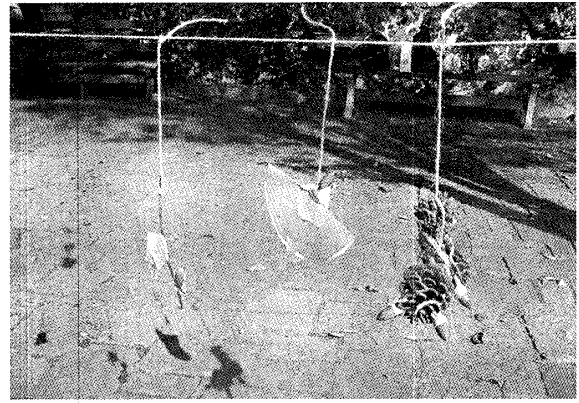


写真6
(Mくん作品)

てもらふことができ、総合的な芸術活動となった。

(3) 自然素材を使用したクリスマスツリーの実践内容

クリスマスツリーの実践は、施設Dが主催するクリスマスイベントでメイン広場に続く入り口に展示するクリスマスツリーをつくって欲しいという施設Dからのリクエストで始まった。用意した自然素材は前回のラインアートと同様のものであるが、その他にツリーのメインの柱となる大型の木材と大きめの木のつるを用意してもらった。作品制作に関しては、全員で1つのツリーを制作する全員参加型とした。まず、比較的作業が可能と思われる年齢の子ども達と学生で釘や縄で大型の柱を固定し、ツリーの基礎をつくった。この場面では集まった子ども達が予想以上に、のこぎりや金槌の扱いができず、事故につながる恐れのある状況であったため、ファシリテーターと施設Dのスタッフがツリーの基礎の大半を制作した。そこに参加者全員で絵の具や折り紙、自然素材によって装飾していくワークショップの内容とした。

この活動の事前指導では、主に幼児への語りかけに重点を置いた。まず、前回の活動の中で学生や保護者からの語りかけによって造形活動に発展した経緯を事例としながら検討した。その上で、筆者から学生へのアニミズムの語りかけを紹介した。アニミズムとは、幼児期の思考の一特徴で、

命のない事物を、あたかも命があり、意志があるかのように、擬人化して考える傾向のことをいう。これは物活論とも呼ばれ、J.ピアジェ(1968)によって提唱されたものである。子どもは段階を経て、抽象の度合いを深めて行くものであり、幼児に限らず私達大人にさえもアニミズムの感性が必ず残っているとも考えられる。このことについて、山田(1998)は以下のように述べている。

人間も地球という生命体の一部分に過ぎないという直感的理解や、地球上の他の生物と共生し、互いに生態系という物質循環の一部を構成するという認識は、地球環境を保全しようとするあらゆる施策において欠くことのできない基礎的な理念を形成するものである。いずれにしても、自然保護や環境保全の思想の基盤に必須な感性や発想、それがここでいうアニミズムである。⁷⁾

図らずも活動の始まったすぐに、幼児と学生とのやりとりの中で、こんなアニミズムの会話があった(図2)。

Nちゃん(3歳)とCちゃん(5歳)は共に姉妹で参加していた。学生Aとともに自然素材で自由に遊んでいた段階からNちゃんとCちゃんは、枯れ葉に興味を抱いていた。枯れ葉の赤、黄、緑、茶色の鮮やかな色彩が好きだったようである。普段、他者から枯れ葉を使って何かに見立てることへの働きかけがなされていない場合、不完全燃焼

Nちゃん：「これ貼るの（枯れ葉などを持ちながら）？」
 学生 A：「うん、そうだね。木さんは服を着てないから寒いね。みんな枯葉で服を着せてあげましょう」
 Nちゃん：「うん」
 Cちゃん：「できた、これ木さんに着せてあげるね（画用紙や枯れ葉、木のつるなどでできた飾り）」
 学生 A：「今度は木さんに帽子を被せてあげましょう（実際にやってみせる）」
 Cちゃん：「帽子つくるね」

図2 ワークショップでのアニミズムのやりとり

となってしまう場合がある。そこで、学生 Aはクリスマスツリーの制作が始まると、クリスマスツリーの土台柱となっている木を生き物に見立てて、NちゃんとCちゃんに声かけをした（図2）。このことにより、〈枯れ葉が好き、きれい＝自然素材の感動〉という思いが〈木さんに枯れ葉の服をきせてあたたかくしてあげる＝自然素材をアニミズムによって命あるものとして捉えなおす〉ことに発展した。また、NちゃんとCちゃんは、この過程によって、表現するイメージの広がりをもつことができ、造形活動のきっかけをつかんだと考えられる。さらに、NちゃんとCちゃんは、ワークショップの始まる前には、自然素材の遊びの中で、枯葉をお互いに散らかす場面も少し見られたが、この学生とのやりとり以降には、そのような場面は見られなかった。このこともアニミズム的な効果の1つであろう。NちゃんとCちゃんは、最終的にクリスマスツリーに様々な色彩の枯れ葉をボンドで貼りながら、鮮やかな装飾をして、参加者全員のイメージが膨らんでいけるようなきっかけづくりをしてくれた。このような集団の中での個々の思い入れによって、他者のエネルギーが生み出されることは、補助学生やファシリテーターがどのように関わっていくかによって左右されることもあり、関係性と共同体としての関わりにおいて、アニミズムは幼児への有効な声かけの1つとして、実証された。

最終的に、できあがった作品は、いわゆるクリスマスツリーの形ではない、斬新なアートとしてのオブジェとなった。NちゃんとCちゃんの最初

に着けてくれた枯れ葉の装飾は完成した時には参加者同士の造形のほどこしによって隠れてしまったが、このワークショップでの個々の幼児へのアニミズムの声かけのきっかけを全体に広げることによって、さらに、全体的にストーリー性やアニミズムの効果を生み出すことができるのではないかと考えられた。

(4) 木材を使用した造形活動の実践内容

クリスマスツリーでのアニミズムの効果について着目した筆者は、今回、学生をファシリテーターとする場面を一部分つくることとした。アニミズム的な声かけを全体的に投げかけること（図3）によって、一体感のある活動が生まれるのではないかと考えられたからである。

木材を使用した造形活動を企画している際に、施設Dより、施設Dのマスコットであるヨーロッパの少年を主人公とした物語性のあるワークショップを開催してもらえないかという提案があり、筆者が打ち合わせをした結果、補助学生とともに物語をつくり、その物語をもとにしたワークショップを開催することになった。その後、決まったタイトルは「森の物語～自然素材を使った木のオブジェ作り～」である。この物語には、少年、馬、羊、豚、兎、ヤギが登場し、立体絵本のように施設Dの広場に設置して、鑑賞できるようにした。このワークショップはこれまでのワークショップとは少し異なり、アートプロジェクトの一環としての記念ワークショップとして開催された。施設Dを会場としたアートプロジェクトでは、

〈馬コーナー〉

馬コーナーでは、自然素材にふれあい、季節を感じて欲しいと思います。あらかじめ私達で鮮やかな色を用意しました。筆を使わず、普段とは違ったもので色を塗ってもらうので、みんなで春らしいかわいい馬にしましょう。

〈ウサギコーナー〉

このオブジェは女の子のウサギさんです。春らしく、綿毛の様にフワフワしたウサギをイメージして作って欲しいので、綿に色をつけて、ウサギさんに服を着せて上げて下さい。

〈少年コーナー〉

これは帽子を被っているドイツの男の子です。今日はこの男の子の帽子と服を一緒に作ろうね。帽子はこの色紙を切って貼って、素敵な帽子を作ってみよう。この男の子は今、洋服を着てないから寒そうだね。みんなで絵の具を使って寒くないように洋服を着せてあげよう。

図3 学生がアニミズムを用い作成した声かけ

神奈川県在住の画家W氏がリーダーとなり、総合プロデュースを手がけた。W氏は施設Dでこれまで行われていた車椅子の来場者へ配慮したボランティア活動に感銘し、「赤城高原に集まった地域住民の方々や来場者の出会いからアートを通じて元気になってほしい」という「町興し」の要素も含むアートプロジェクトを企画した。この呼びかけによって集った全国で活躍する画家、彫刻家、デザイナー、パフォーマンスアートなどの各分野の現代美術作家による大がかりの企画となった。そこで、アートプロジェクトに来場した子どもへのワークショップとして、今回は開催してほしいと依頼されたのである。このアートプロジェクトでは、ワークショップを皮切りに、特別展示として、絵画や彫刻、インスタレーションを来場者に鑑賞してもらえる内容となっていた。ワークショップの詳細としては、2回構成とし、第1回では「ヨーロッパの少年をイメージし、オブジェを制作」、第2回では「少年の周りで遊ぶ動物のオブジェの制作」を行うこととした。補助学生は、事前に短大で木材を基にして「少年、馬、羊、豚、兎、ヤギ」のラフデザインをし、木材を電気のこぎりなどで加工し、釘、針金などで骨組みをして、オブジェの基礎を作った(写真7)。学生はそれぞれ、少年、馬、羊、豚、兎、ヤギのコーナーの担当に分かれ、準備を行った。学生自身ものこぎりなどの扱いに

慣れていないため、苦心して制作していた。事前指導のおおよそは、この木材の加工であったが、この他に、前回のアニミズムを用いたナレーションを各コーナーの学生に作成してもらうこととした(図3)。

ワークショップの実践では、補助学生がファシリテーターとして行ったナレーションの部分(図3)もあり、全体的に物語性のある活動となった。第1部の少年コーナーでは折り紙で帽子を作り、カラフルなモザイク調の帽子の制作が進んだ(写真9)。学生によるナレーション通りに絵の具を使って少年の服のデザインをしながら、全体的に完成イメージをもった活動となり、参加した子どもの制作の様子も協力性のある場面が多かった。

第2部の活動では自然素材のアプローチとして、綿を使用した活動(写真8, 10)などから、立体的な造形の面白さを演出していた。第2部の動物のオブジェを制作している場面において印象的だったJくん(5歳)(写真8)は、絵の具や筆などの描画材料に興味を示さなかったが、綿をちぎるのが好きだったようである。羊のフワフワした質感を出そうと、羊コーナーにおいて、ひたすら綿をちぎって木材の羊に質感を出そうとこだわって制作していた。Jくんのようにいわゆる描画や絵画的な造形活動に関心を示さない子どもであっても、色彩のない、白い綿を使用して、それ



写真7
(加工した木材を組み立てる学生)



写真8
(羊コーナーの綿を使用した制作の様子)



写真9
(少年オブジェの制作の様子)



写真10
(兎コーナーの制作の様子)

を組み合わせることによって立体感を出していく造形活動に関心を示すこともある。そのような子どもにとっては、造形活動を噛み砕きながら、柔軟な発想で、造形活動を支援することで、そこで過ごした時間そのものがアートとなるような関わりの重要性を認めることも大切である。羊コーナーの学生も少年オブジェの制作において、描画や色塗りを積極的に行わなかったJくんが、第2部では積極的に綿で創作しながら、造形活動を楽しんでいた様子を印象にとめていた。

今回のワークショップでのアニミズムの語りかけは、個々への対応にも有効性が認められただけではなく、参加者全体に投げかけられる方法であったため、積極的に参加してもらえた保護者が多数出てきてもらえたとも考えられる。

(5) 羊毛を使用した造形活動の実践内容

羊毛を使用したワークショップでは、施設D内で飼育されている羊から刈り取った羊毛を使用し、実践することとした。この企画についても施設Dからの素材提供による提案を受けた。前回のアートプロジェクトの第2回の記念ワークショップとして企画されたこの活動の特色としては、アートプロジェクトの実行委員として参加している東京都在住のデザイナーOさんとのコラボレーションによる共同企画として行われたことである。Oさんは、テキスタイルデザイナーとして、多くの作品を制作発表しており、現在は人間の影をモチーフにした現代人の生活をテーマとして作家活動を行っているデザイナーである。

Oさんは、第1回のアートプロジェクトで行われたワークショップに関心を示してくれたことから、今回、育英短期大学保育学科のワークショッ



写真11
(デザイナーによる講習の様子)

ブ補助学生との共同コラボレーションを行って
くれる作家として参加してもらうことができた。

羊毛を使用したことによって、苦心した点はその素材の特性が扱いにくいものであることと、洗浄に非常に手間がかかるということである。施設Dから刈り取られてきた状態の羊毛は泥や羊の油、糞などがひどく、洗浄をよぎなくされた。Oさんとの打ち合わせから、羊毛専用の特殊な洗剤を使用し、ある程度汚れを落とし、学生が試作できる状態としてもらった段階で、一度、学生向けに羊毛を使用したワークショップのための講習を行ってもらうことにした(写真11)。この講習では、羊毛のもつ素材を理解するために、学生とともに羊毛の洗浄を学び、羊毛を造形活動として行うための基礎的な手法と約束について、具体的にOさんが羊毛で作った作品を基にししながら、講習をしてもらうことができた。

学生が羊毛を洗浄した場面(写真12)では、思っていた以上に素材の扱いが困難であり、苦心していた学生が多くいた。この講習では、羊毛の洗浄方法、羊毛を丸める、羊毛を板状にするという3つの方法について実習を行った。ワークショップの実践日は、Oさんが参加できなかったため、学生はこの事前指導での素材体験を生かして、ワークショップに臨むこととなった。

当日は、あらかじめ、事前準備において、参加者全員で水に浸した羊毛を丸める作業から入っ



写真12
(羊毛を洗浄する学生)

た。初めて羊毛に触れる子どもは羊毛の素材を丸めることに苦心しながら、羊毛をボール状にしていた。

ボール状にした羊毛は色画用紙への平面的な作品とすだれのようにした立体的な作品に制作してもらったこととした。平面状の作品では絵本のように羊のデザインをする子どもが多かった(写真14, 15)。また、すだれ状の作品ではまつぼっくりと混合したユニークな作品も見られた(写真16)。学生は事前指導において、羊毛を扱うことに関する困難さを体験していたため、子どもへの関わりの際にも羊毛の特性について丁寧に説明を行っていた(写真13)。自然素材の中でも動物の毛を使用したのは、このワークショップが初めてであったが、補助する学生が事前準備の試行錯誤の素材体験をしていなければ、対応できない活動であった。その点で、Oさんとのコラボレーションは大変有意義なものであった。

3 まとめ

1) 保育士養成校の学生への教育的意義

ワークショップ終了後、学生からは、以下のような感想があった。

- ・「こうした機会はあまりないけど、子どもや参加者にとって、とても大切な要素があると思った」
- ・「最初のうちは子どもも自分たちもとまどっ



写真13
(羊毛によるワークショップの様子)

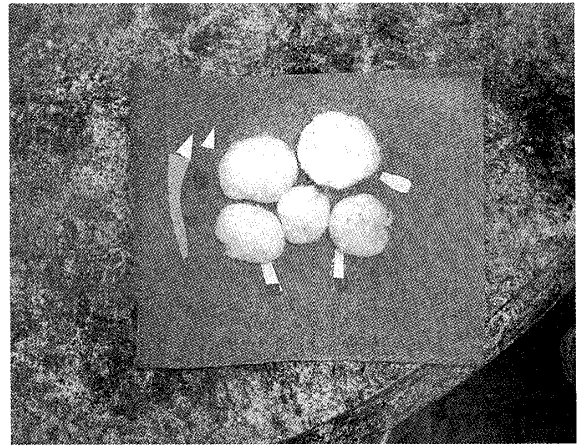


写真14
(平面的な作品)

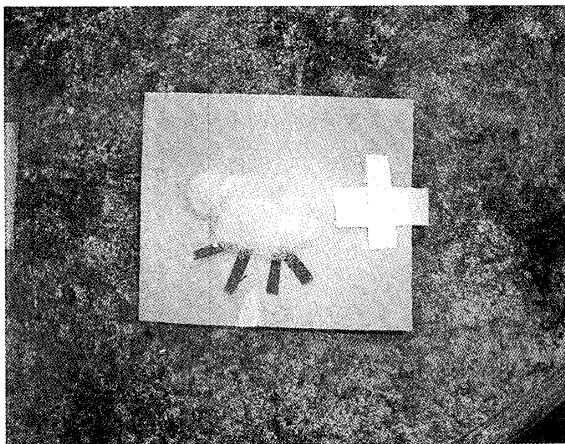


写真15
(平面的な作品)



写真16
(羊毛によるすだれ状の作品)

てしまい、うまく触れ合えなかったけど、こちらから造形活動に対する具体的な声かけをすることで人見知りしている子どもも心を開いてくれた」

- 「ワークショップが始まるまでは想像できなかったけれど、始まってみると思っていた以上に楽しかった」
- 「自然のものを題材としていることが今の子ども達に自然に興味をもたせることができる良い行事だと思った」

これらの感想から、学生への授業実践としては理論的な面の他に、実際の子どもを通して、学生が

肌で感じることにより、教育的な意義と保育士養成としての可能性が多くあると考えられた。子どもの成長過程における特色や言葉かけについては、単一の決まりきったものではなく、常に進行し、多くの可能性を秘めていると考えられる。そのため、学生自身が理論的な事前学習としての知識にとどまることなく、実践の中で検討を行うことにより、今後、保育士としての社会的な経験を積む場として有効な実践となりうるものであろう。

さらに、本研究のワークショップでは、筆者がファシリテーターを務め、進行していたが、今後は学生をファシリテーターとして、ファシリテーター

ションを学ぶことを目的とすることで、さらなる可能性を広げていくことができると考えられる。

2) 子育て支援としての可能性

本研究のワークショップに参加した子どもは美術館で行うワークショップなどのように事前募集を行っていないため、偶然による新鮮な出会いも体験する。そのような参加者構成の中で、社会性や協調性も深まると考えられた。

さらに、参加した子どもの保護者は、ワークショップを行う学生が短大保育学科の学生ということによって、様々な遊び、声かけなどの専門的な教育を受けていることへの安心感から、子どもへの指導や補助について抵抗なく預けられる背景があると感じた。実際に、補助学生は子どもとの交流を楽しみながら活動していた様子が見られ、このことも非日常的な空間であるワークショップの場面に参加させやすい、子どもをもつ保護者の視点ではないかと考えられた。ワークショップとしての癒し効果もこのような保護者の思いを大切にしていくことの一つとして考えられよう。ワークショップに関わったそれぞれの人たちが、造形活動を通じて、ストレス解消や気分転換になることが、共同体としての関係性や共同行為を生み出すきっかけにもなりうるであろう。子どもと同じように、夢中になって制作する保護者の姿もワークショップ内で見られ、子どもの活動のみでなく、子育て支援としての保護者への視点も見失ってはならないのであり、ワークショップの環境設定の際、心がけなければならないところである。

3) 自然素材の造形性

地域の造形資源に関連して、蝦名(2004)は「人間が関わってきた身近なものに対して価値を見出す態度が芽生えればと思う。これらの造形は、人

間が生きていく上で直面するかなしみに向き合いながらも、祈りによって昇華させている。そこに、逆説的に生命力、根源的なものが感じ取れるのである」⁸⁾と述べている。この見解については、筆者のワークショップの根底にもある要素であり、地域の自然素材を通して、学生及び参加者に感じてほしい部位でもある。

筆者は、自然素材を通して、人間としての表現の意味、その歴史やルーツまでも見つめなおすことのできる造形表現の根源的な部分に迫っていきたいと考えた。その手段として、自然素材の有効性が参加した子どもの様子から垣間見られた。しかし、自然素材については、今後も研究の余地が多くある。

註

- 1) 中野民夫,『ワークショップ』,岩波新書,2001,p.21
- 2) 同掲書,pp.21-22
- 3) 同掲書,p.11
- 4) 吉川暢子,「ものづくりの場としてのワークショップの可能性」,『大学美術教育学会誌』第39号,2006,p.392
- 5) 1912年、ワイオミング州コーディに生まれる。1928年からロサンゼルスのマニュアル・アーツ・ハイスクールに学び、1930年からニューヨークのアート・スチューデント・リーグでも学ぶ。当時全盛だったアメリカン・シーン派(地方主義)の画家トーマス・ハート・ベンソンの指導を受ける。
- 6) 高橋敏之,「幼年期の家庭における造形活動と人的環境としての保護者とのかかわり」,日本家庭教育学会誌『家庭教育研究』第7号,2002,pp.1-10
- 7) 山田辰美,「自然への興味をかりたてる遊びの研究—木の実を用いた造形遊び—」,『常葉学園短期大学紀要』第29号,常葉学園短期大学,1998,p.12
- 8) 蝦名敦子,「地域の文化財を活用した鑑賞教材開発の試み—縄文文化と棟方志功をめぐる—」,『大学美術教育学会誌』第37号,2004,p.70

(2007年10月16日 受付)
(2007年11月30日 受理)